

## 解 答

## 【一】

- 問一 2      問二 4  
 問三 ① 1      ② 4  
 問四 3      問五 3  
 問六 1      問七 2  
 問八 1      問九 4  
 問十 1      問十一 2  
 問十二 1      問十三 3  
 問十四

五歳の筆者にとって父親の背中とは父親そのものであり、世界のすべてだった。父親の背中を見つめ、追いかけて、しがみついていた世界は安定し、幸せが満ちあふれる。それがとつぜん消えた時の絶望を思うと胸が痛むが、結果として父娘にほどよい距離が生まれたのは興味深い。父の前で素直になれない私にとって、近からず、遠からずの関係は理想的だが、たがいに歩み寄る気配はまだない。

## 【二】

- 問一 絵と文章の両方を同時に楽しむ  
 問二 めくるという読者の動作が必要であるところ・読者が自分の間の置き方を決められるところ  
 問三 生活は便利になったが人の心はすさんだ。  
 問四 人格の基礎が作られる時期  
 問五 絵本の読み聞かせ通じて親子間の愛情を確認できるから。  
 問六 ① めくると話が進展する、何かが変化する      ② 作話と絵作りをめくる動作に合わせる。  
 問七 ⑤～⑧  
 問八 絵本は絵と文章で構成され、読者が主体性を持って楽しむ鑑賞媒体である。ページごとに新しい世界が広がるような芸術性の高い絵本は読む者の感性を豊かにするため、子どもの成長にとって重要な役割を果たしている。

## 【三】

- 1 拳      2 造      3 大漁      4 汽笛      5 借用      6 もう      7 こ      8 はか

## 解 説

## 【一】出典は、いせひでこ「七つめの絵の具」。

- 問一・二 五歳の春、「私」（筆者）は家族とともに北海道の函館に移り住みます。銀行員だった父親はある日「赤いかわぐつ」を「私」にプレゼントします。「素足にゴムぐつが下駄」が「子どものいっぱん的なはきものだった」ころのこと。「足の甲のところに～きゃしゃでスマートな赤いくつ」を見た「私」はいつべんで魅了されてしまいます。「優雅で美しい」自分の足もとをながめれば「気分はもう小公女かマンガの主人公」。心はあっという間に夢の世界へと飛んでいきます〈問一→2〉。きれいな靴を履いて早く外に出たい。雪解けまでがまんでできなかった「私」はまだ雪が残ってぬかるんでいる外へ飛び出してしまいます。「つくしやたんばぽを～登ったり破かいしたり」しているうちに、せっかくのきれいな靴はつま先部分が「あっというまにはげて」しまいます。それを見た父親は叱ることもなく、ただ「だまって赤いクレヨンでぬって」くれました。「私」の父親は「気まぐれにおもちゃやケーキを買って」くるような、ちょっと不思議なところのある人だったようです。幼い「私」が「小走りでがんばっても」追いつけないほどの速さで歩く姿は子どもに無関心のようにですが、一方で「大きな木を見つけると、歩きたがった」「私」を「無言で見ていて、あぶなっかしいしゅん間だけうでをのば」すような人、すなわち子どものことを見ていないようで、しっかりと見ている人です。子どものことをよく見ていない人なら、自分が買ってやった上品な靴を泥だらけにしたことを怒るかもしれません。けれども、子どものことをよく見ているこの父親は、靴を汚したのは子どもがうれしくてうれしくて仕方がない気持ちでいっぱいだったこと、どうしてもがまんしきれなくて、まだ雪が残る外に飛び出してしまったことなど、すべて理解したうえで、はげてしまった靴のつま先に「だまって赤いクレヨンでぬって」いる。静かに黙って靴を直す姿からは子どものすべてを包みこむような、父親の大きな優しさや愛が感じられます〈問二→4〉。
- 問三 「日曜日はおとうさんと～おしえて」もらえる。五歳の「私」にとって、「わたあめの雲と～父との日々」はかけがえのない大切な時間でした。終わりがくることなど想像できないほど幸せな日々。幼い「私」にこの楽しい時間に終わりがくることを疑う理由など何一つありませんでした〈①→1〉。けれども「永遠にあるように」思えた幸せな日々はほどなく終わりを迎えることとなります〈②→4〉。

問四 父親が突然いなくなったという事実を五歳の「私」が受けとめられるはずありません。朝に夕にと父親の姿を求めて泣き叫ぶ「私」の目に、夕日の「すさまじい赤を背景」にして、まるで「黒いガイコツのように」揺れる「父の背だけくらいあるヒマワリ」の姿が映ります。ただのヒマワリが恐ろしげに見えたのは、とつぜん父親の姿が消えてしまったことで、それまでの楽しく平和な世界を一気に崩されてしまった「私」が大きな恐怖を感じているからに他なりません〈→3〉。

問五 全幅の信頼を置いていた父親がいなくなったことで、幼い「私」の心にはぽっかりと大きな穴が空いてしまいます。人生が「はじまったばかり」だった「私」にとって、「父の存在感」はかけがえのないものでした。色がはげた靴のつま先を塗ってくれる人はもういません。大きな喪失感を抱えた「私」はその空虚な心を埋めようとするかのように自分の手で赤く塗り続けます。父親が買ってくれたすてきな靴が「だんだん小さくみすばらしくなって」いくとともに、心の中から父親との思い出が薄れていってしまふ。記憶がおぼろげになっていくことに抵抗するかのように、幼い「私」はひとり黙々と赤いクレヨンで靴のつま先を塗り続けます〈→3〉。

問六 父親を失った「私」の苦しみは続きます。「年長さんなんだからしっかりね。ごあいさつちゃんとするのよ」という母親のしつけは、父親から何かを強制されたことのなかった「私」にとって、「ふだんしたことないごあいさつなんかできるはずがない」という違和感を抱かせるものでした。父親と一緒にのときは無頓着だった髪の毛も、身だしなみを気にする母親は「ゴム」できちんと束ねようとします。基本的に子どもを自由にさせていた父親とは対照的に、一通りのことをきちんとさせようとする母親のやり方は、「私」にとって苦痛を感じさせるものでした〈→1〉。

問七～十 「私」の世界は次第に色を失っていきます。父親と登った「坂」も、一緒に遊んだ「公園」も、仕事場に向かう父親を見送った「道」も、父親の記憶と結びつくものすべてが「私」に悲しみをもたらすようになりました。そんな「私」の気持ちを理解してくれる人はいません。「三つあみ」が痛いと言っては泣き、幼稚園に行きたくないと言っては泣いているうちに、「私」の心は華やかな色彩あふれる春の光景を目にしても、もはや何も感じられないほど疲れきってしまいました〈問七→2〉。お気に入りだったあの靴ですら、赤いクレヨンで塗られることもなく、形も崩れたままで「玄関」の片隅に放り出されています。「赤いかわぐつ」は父親と過ごした楽しい日々を思い起こさせるものです。無残な形で放置されているそれは、父親と過ごした幸せな記憶の残骸であり、「何日もおとうさんの背中に会ってない」ことで、「私」の幸せな記憶が傷となって心の片隅に残っていることを暗示しています〈問八→1〉。けれども、幼稚園をやめ、「もつれ髪のまま～妹とふたりで遊ぶ」ようになった「私」は「保育園」という新しく、魅力的な世界を発見します。「私」と妹は自分たちから「近づいていき」、「いつのまにか保育園の子ども」となり、後に札幌へ引っ越すときも「私」は「ひとり」で保育園に「あいさつ」に向かいました。そこにはもはや父親の影はありません。父親の不在が長く続いたことで、「私」の心の中にある父親を求める気持ちが弱まり、「私」は自分で自分の居場所を見つけることができるようになりました〈問九→4〉。「私」の心は「色」を取り戻します。再び楽しい日々が訪れました。父親がいなくなった時は不安と恐怖で恐ろしげに見えたヒマワリも、夏の名残をとどめているただのヒマワリに戻りました〈問十→1〉。

問十一 父親のいない新しい世界を手に入れた「私」でしたが、関係が完全に断たれたわけではありませんでした。退院して家に戻ってきた父親に以前のようにまわりつくことはありませんでしたが、「私」はその「背中」を黙って「みつめつづけて」います。密着でもなく、完全な別離でもない。存在が感じられる程度の距離を保ちながら、娘は「病みあがりの父」の背中に温かい視線を送ります〈→2〉。

問十二 晩年を迎えた父親は、「最後の誕生日」に「赤いセーターが欲しい」と「私」にリクエストします。「私」が贈ったセーターの「深紅」は、あの「かわぐつ」の「赤」に通じるものがあります。父と娘の幸せな日々はいつも鮮やかな「赤」で彩られていましたが、父親の死ですべてが過去のものとなります。父親の亡骸とともに「ひつぎの中で、白い花々でうめつくされ」た思い出の「赤」は、「私」の心の中で色褪せることのない永遠のものとなります〈→1〉。

問十三 父親が亡くなってから三年の月日が経ったころ、「私」は自分の心の中から父親を求める思いが消えていることに気づきます。父親との大切な思い出が消えてしまったわけではありません。美しい思い出は心の奥底で永遠に生き続けていますが、「私」はその思い出の中にとどまっているわけではないということ。「私」の歩む先にいつも見えていた「父の背中」はもうありませんが、幼いとき、突然その背中を失い、一瞬にして世界が暗転し、絶望の日々を送る中で、いつの間にか保育園という居場所を見つけたように、今度もまた、自分の力で自分の歩むべき道を見つけないければなりません。父親を失ってから三年という月日を経て、「私」は目の前に「父の背中」という指標がなくても、心の奥底で永遠に輝き続けている幸せな思い出に支えられながら、自分の人生をしっかりと歩むことができるようになったわけです〈→3〉。

問十四 「私」という人間は「父の背中」によって作られたと言えるくらい、「私」にとってそれはかけがえのないものです。幼い時は「私」の世界のすべてであり、病気が治ってから常にも「私」に寄り添い、先導してくれる大切な存在だったことを踏まえて、感想をまとめます。自分と父親の関係と対比するのがオーソドックスなスタイルですが、「自分のところはこうだ」と実情を述べるだけにとどまり、「感想」を述べないまま終わってしまわないように気をつけましょう。もちろん、別の観点からまとめても構いませんが、内容が抽象的にならないように注意が必要

です。自分が文章から読み取ったことと感想について、ある程度の具体性を持たせながらまとめます。

【二】出典は、藤本朝巳「ぞうくんはどっちを向いている？ 楽しい絵本学」。

問一・二 「動く映像を見、同時に役者の声や効果音を聞いて楽しむ」「映画」と同様、絵本は「絵と文章、すなわちイラストレーションとテキストを用いて、何らかの情報を読者に効果的に伝達」します。「映像」と「声（効果音）」、「絵」と「文章」という、それぞれ二つの要素を同時に見聞きするという点において、「映画」と「絵本」は共通する特性を持っていると言えます（→問一）。一方で、「映画やアニメ」といった表現媒体は「ただじっとすわって見て聞いていれば、どんどん映像と音が勝手に先に流れて」いく、いわば見る側が「受動的」「消極的」な立場に置かれるのに対して、「絵本」は「だれかが手で『めくる』という能動的な動作を必要とする点で両者は対照的な特徴を持っています。さらに、この「めくる」という動作は読み手が「自分の好きな間をとって見ていく」ことを可能にしています。「映画やアニメ」は受け手が情報の送り手側のペースに合わせる必要がありますが、「絵本」は「読者が自分のペースで楽しめる、すなわち、読者自ら、『自分で間の置き方を決められる』という特性を持っています（→問二）。

問三・四・五 筆者は「機械化・情報化が進み、生活が便利になり」、「快適さ」を手に入れた「世の中はどんどん発展してよくなっているように」見える一方で、「物騒な事件や、以前には考えられなかったような不可解な事故も続発し」、「政治も経済も不安な方向へ向かっている」ことから、「人間の心はますますすさんでいくように」も見えんとしています（→問三）。「もちろん世の中が悪くなるには複合的なさまざまな要因がある」としながらも、筆者は「世の中の全体的な劣悪化と、子どもが育つ幼少期の環境が無関係」ではなく、「どんなに生活が便利になろう」とも、「人と人との直接のふれあい」を通じて「人格の基礎が作られる」幼少期の環境が悪ければ、豊かな心を持つ子どもが育つはずがないと考えています（→問四）。では、幼少期の子どもたちにどのような環境を整えてやればよいのでしょうか。「テレビやビデオ」を見せておけば、大人はその間になにか別のことができるので効率がいい。けれども、これらの表現媒体は一方的に情報を送りつけてくるものであり、子どもたちはそれを「受け身」の姿勢でただただ受け取るだけとなるため、それでは「あたたかい人間関係」の構築など望むべくもありません。その点、「絵本」の読み聞かせは、子どもたちに「親しい大人がそばにいて、ゆっくり時間と手間をかけ、愛情こめて相手」をしてきているのだという実感を与えるものであり、親子間で愛情を確認し合い、温かく豊かな関係を築くのいうってつけの作業であるといえます（→問五）。

問六 絵本表現がその効果を発揮できるかどうかについては、「めくる動作」という絵本の持つ大きな特性が鍵を握っています。ページを一枚めくることで「何かが広がる」、すなわちページをめくると、次にはどんな展開が待っているのだろうか、という期待を読者に抱かせるような「変化」を用意すること（→①）、さらには、「めくる動作に合わせた作話と絵作り」ができていくかどうか、「絵本の善し悪しを左右するポイント」です（→②）。

問七 ①～④段落では、絵本の性質について説明しています。「絵と文章」を同時に楽しめるという、映画と共通する絵本の性質をあげた上で、「めくるという動作が必要である」、「自分で間の置き方を決められる」という絵本ならではの特性をあげています。⑤～⑧段落では、「快適さの一方で人間の心はますますすさんでいくように思え」というふうに、近年の社会についての筆者の考えをのべた上で、絵本を通した「人と人との直接のふれあい」の重要性を説いています。⑨段落からは、この文章の「本題」である絵本の「特性」の説明に戻り、内容をまとめています。

問八 この文章は「絵本」の形式的な特徴とその効果について述べられています。絵本は読む側が主導権を握り、主体性を持って楽しむという特性を持っています。筆者は人格の基礎が形成される幼少期に「芸術性の高い絵本」に触れることで、「感性豊か」な子どもたちが育っていくと考えています。